

「霞ヶ浦導水事業の検証に係る検討報告書（素案）」に対する関係住民の意見聴取

平成 26 年 3 月 2 日（日）13:04～13:14

霞ヶ浦導水工事事務所 2F 第一会議室

発言者：意見発表者 1

小美玉市●●●●●●●●●●住所、●●●●●●●●●●です。私は、ふたつお話を、意見を述べたいと思います。ひとつは水質です。水質のことについては素案では根拠は示されておりましたが、 0.8mg/l 。これは、1995年の工事事務所で作られている報告書です。あのモデルにしたがって出されていると思いますので、それについてまずお話しします。モデルは、その報告書の中では、流出です。それから浮上だとか溶出、沈降あるいは内部の代謝からなっている。これはいいと思うのです。そのなかで数字を入れるときに流入、流出、水質あるいは負荷量。そういうものはきちんと決まった数字があるから妥当だとお話しました。問題となるのは、浮上だとか溶出、それから沈降、この数字が妥当かどうかということだと思うのです。報告書の中ではきちんとした説明はないけれども、私がこのなかで一番問題となると思うのは、溶出のところ、溶出。これはこの報告書の中では、実験です。実験室内での実験です、数字は。そこが問題だと思うのです。私は、あのモデルでどこが足りないかというと、同じモデルなのですが、底生動物あるいは魚類の代謝が底質にかかわる、それからバクテリアによる溶出にしても好気・嫌気とふたとおりある。ここのが弱いのです。特に生き物のところが全然入っていない。それから、水圏の方です。水の方についても動物プランクトンの代謝やそれを食べる魚類の代謝があるので、ここを入れなければいけないのです、モデルに。入っていないのです。溶出のところではバクテリアの溶出よりは、例えば、エビだとかベントスだとか魚類、そういうものの摂食による代謝が圧倒的に多いので、そこで誤差ができる。そういうモデルで 0.8mg/l をいう。これだけきれいになるということをするのは非常に難しい。というのは、最近の10年間のCODの変動です。平均値は 8.1mg/l 、そこから 0.8mg/l 上に行く、この線です、点線。下限はこの点線です。予測値これが全部変動の幅の中に入ってしまうから、だから誤差にもなるし、それから効果が怪しいぞということ。だから 0.8mg/l とっておられるけれども、それはあくまでも目安なのです。保証はないわけ。浄化の保証はどこにもない。一方、これは現場のデータです。横軸は、霞ヶ浦の流域から入ってくる水の量です、流出量です。年間の流出量は13.8億 m^3 といわれていますから、ここから雨がいっぱい降って、川からばつと水が入ってくると、導水と同じ効果を生みます。だから、この流出量に対してCODをこのように言っていたら、もし、効果があるとしたらこうならないといけない。黒丸は何かというと、これは逆水門を閉める前です。逆水門を閉める前は、見かけ上ですけれども、雨が降った夜とCODは下がります。あたかも導水による効果があるように見えます。だけれど、これはほんとうはそうではない。あまり細かいことは言いませんけれども、逆水門が開いているから、流域で降った雨だけではなくて、利根川の方の流域から入ってくる水がこの浄化にかかわっているわけ。だから、雨がいっぱい降ると水がきれいになる。ところが最近、どうなっているかというと、ややこしいので、管理後1996年以降について言いますと、このバツ印です。流量が増えてもバツ印変わりません。浄化は起きないのです、これ。いかがでしょうか。浄化は起きない。これ実証です。モデルを使ってシミュレーションをやったわけではなくて、現場の流量と現場の観測、湖沼観測結果で出した結果ですから浄化はできない。これ、証明されます。2番目、生物多様性の話です。生物多様性は那珂川の方ではアユとかハゼもそうですし、ヒヌマニシンとかいろいろあります。それからジジミの漁業のこともあるの

ですけれど、ウナギ1種類だけ取りあげました。ウナギは昨年の2月に絶滅危惧種B類に指定されております。ウナギの漁獲量を見ると全国はこういうふうには減ってきている。それから利根川水系もこういうふうには減ってきている。一直線に減ってくるわけです。だから危機感をもって環境省はそういうふうにしたわけですが、問題なのは、シラスウナギなのです。全国のシラスウナギがこうやって減ってきますけれども、利根川のシラスウナギが特に危ないのです。2010年と11年はゼロなのです、シラスウナギが。全国のウナギの漁獲量、利根川のウナギの漁獲量を比較しました。そうすると、見事な直線です。利根川のウナギが全国のウナギのシェアを決める、そういうことではないでしょうか。上の線は利根川を含んだもの、利根川を除いたバツ印についても、利根川の漁獲量が全国のウナギシェアを決めるということだと思ふのです。その逆かもしれないです、本当は。それは今から説明します。もし利根川のウナギが全国のウナギのシェアを決めるとすれば、ある年の利根川のウナギの、これは親ウナギで見ます。次の年のシラスウナギの漁獲量、相関とると見事な直線になります。すなわち、利根川のウナギが全国のウナギをまかなっているということです。みつつ外れます。1967、68、69年です。みつつ外れます。これは、利根河口堰の建設期間中です。利根川が影響している、河口堰が影響しているということです。これは、全国のシェアです。霞ヶ浦も利根川も入っています。次は、霞ヶ浦と利根川を除きます。利根川の親がほかの河川、例えば筑後川だとかあるいは浜名湖だとかそういうところのウナギをまかなっているということです。すごいでしょ。ということで、おわかりいただけたでしょうけれど、今の話はウナギの話、一番の話は導水事業で浄化されないことが証明されたというふうに私は思います。さっきのデータで。これについて反論がいただければ、私が間違っているかもしれない。2番目、ウナギについてはただでさえ減ってきて、いまほとんどゼロになっているシラスウナギが。25m³/sの取水最大、これやったらなくなります、間違いなく。それは、霞ヶ浦だけの話ではない、利根川だけの話でもない、日本全体の話でもない、太平洋の話です。産業的に言えば東アジア、台湾もある中国もある韓国もある。そういう産業に打撃を与える国際問題です。これについてどう対処されるかお聴きしたいということで、私の意見を終わります。発表は以上です。